

山と博物館

第45巻 第10号 2000年10月25日

市立大町山岳博物館

秋空の下で

丸山 卓哉



小熊山にて 撮影 丸山 卓哉

秋葉が終わって秋らしい日が続くようになると、この山沿いの地方では春とならぶいい季節である。空気が澄んで山の色もはっきりとし、新雪の来たアルプスの峰々の眺めは、やがて里に下りて来るという焦りに似た気持ちをごこかに感じながらも、やはり美しい。地上も収穫の季節をむかえ、それぞれに色づき、この一年の成果を誇っているようである。梅雨の晴れ間を五月晴れというが、この季節には小春日和という言葉がある。窓からも深く陽が射すようになり、朝の冷え込みがあつてこそ日差しのうれしさを感じる。

秋の爽やかさは、大陸からの乾いた高気圧による。夏の小笠原高気圧が弱まると北の方から秋の高気圧が下りてくる。小笠原高気圧の勢いがまだあるうちは秋の高気圧は北に偏り、日本列島には前線が停滞して事によつては今年のように梅雨以上の大雨になる。やがて高気圧が日本列島の上を気圧の谷と交互に通過するようになり、時には帯状高気圧となつて、いく日も晴天が続く。

ところで、秋は日をおつて日暮れが早くなっている。夏には一九時頃であつた日没は、一〇月には一七時頃となつていく。その上、太陽が深い角度で沈んでいくので、暗くなるまでの時間が夏より二割ほど短く、これが「秋の日はつるべ落とし」の所以である。さらに、地球は楕円形を描いて太陽をまわっているため、日没が一番早いのは冬至ではなく、一二月の初めになることが拍車をかけているようだ。

秋の日がとつぷりと暮れると星達の世界となる。忙しかった一日を早く休ませてくれるようにいつそ輝きたす星は、他の季節とはどこか違う。おうし座、ぎょしゃ座、そして、ふたご、オリオンと夜半前には冬の星座も出そろつてしまう。今、おうし座には木星や土星といった明るい惑星が花を添えて、星の世界は一段とにぎやかさを増している。秋空の下、昼間も良いが、星の世界も最高の季節である。

(山岳博物館友の会 副会長)

北アルプスに生息する ツキノワグマ

泉山茂之

はじめに

古くから、ツキノワグマは強靱な身体と優れた運動能力を持つために、人々からは畏敬の念の向けられてきました。この森の住人は、とてもおとなしく神経質な生き物なのですが、「猛獣」として誤解している人も少なくありません。また近年では、農作物被害や人身被害を引き起こすこともあり、やっかいもの扱いをされることもあり。おもに山村の人々との軋轢は、私の知るところ人間の側の不注意によるものがほとんどで、ツキノワグマの有害駆除が頻繁に行われているのは、本当に残念なことです。ツキノワグマとの共存のためには、まずクマたちのことを良く知ることが必要です。

北アルプスで、野生動物の調査を始めた理由はいくつもあります。一つは、大型の野生動物が健康に生存してゆくためには広大な生息地が必要で、人間の生産活動が困難な高山帯・亜高山帯が重要であると考えたことです。人口が多く国土が狭い日本では生産活動が奥地でも必要で、野生動物と農林業との軋轢が深刻であるという現実があります。もし、高山帯や亜高山帯で生活が完結しないなら、山麓を含めた生息環境の保全が必要でしょう。北アルプスには、大型の野生動物としては、ツキノワグマ、ニホンカモシカ、ニホンザル

が生息しています。ニホンカモシカは厳格ななわばりの中でオスとメスが生活しています。また、ツキノワグマは広大な行動圏を持ち単独生活を行っていますが縄張りを持っていません。ニホンザルは群れ生活を行いなわばりを持っていません。このように、この三種はそれぞれ全く違った生き方をしています。このような種は、*Ursus arctos* (熊を差しかけて他の多くの生物種の庇護を保障する種)と言われます。これらの種が健康に生きてゆけるなら、他の小さな野生動物たちも健康に生きてゆけるはずで、

さらにもう一つは、高山域の野生動物は人

為的な影響が軽微であるために、種本来の持つ生態を知ることができないのではないかと考えたことです。私は大学卒業後、大学の研究機関に在籍してサルの農作物被害対策に明け暮れてきました。畑や造林地に依存しない、人為的な影響を受けていない野生動物たちがどんな生活をしているかを知りたいと考えました。狭い国土で野生動物と共存するためにどうしたらよいか、そのヒントがどこかに隠されているのではないかと願いました。生き物にはそれぞれの生き方があり、それぞれの姿を写す鏡を期待したので、

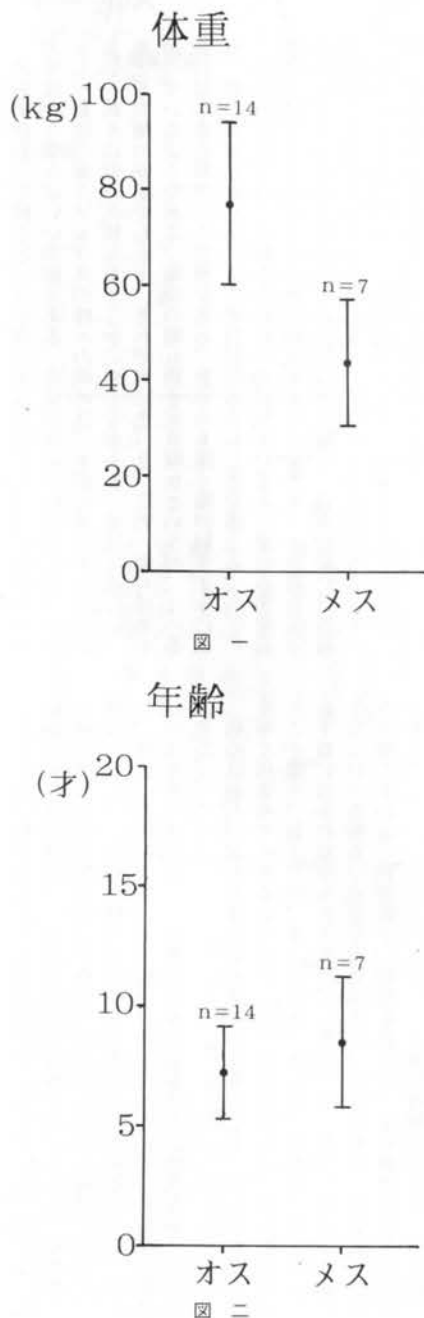
ツキノワグマはとても神経質な生き物で、山でクマを目撃することはめったにありません。私の数少ない経験の中で、いまでも深く心に残っている情景があります。一九九一年九月一日のことです。槍ヶ岳につづく東鎌尾根から、カール底のお花畑にいる親子のクマたちを長時間観察することができました。快晴の日中、母クマは悠然と餌を食べ、その脇で二頭の仔クマがじゃれあっていました。セ

リ科、キク科などの大型草本類が多い、亜高山帯上部から高山帯に至るお花畑は、クマにとって重要な採食場所であることは明らかです。本来、鳥獣保護区であり国立公園でもある高山域は、クマにとって最後に残された楽園であるはずで、

北アルプスは、山地帯から亜高山帯を経て高山帯に至る、多様な自然環境を含む広大な山岳地帯です。ここでツキノワグマは、どんな生活をしているのでしょうか。これまでに得られた調査結果からお話ししましょう。

体重

三才以上の成獣個体について、オス一四頭、メス七頭の平均体重は、オス七七・一kg、メス四三・七kgでした(図一)。オスはメスに比べて大型で大きな差がありました。オスの最大は、上高地で捕獲した一三九kgでした。クマの体重は、夏季に最低で、初冬の冬眠直前に最大になり、著しい季節変化が認められます。北アルプスのツキノワグマは、西日本



や丹沢などに比べ、東北地方と同様に明かに大型です。北アルプスのツキノワグマのフルサイズは、オスで一〇〇kg以上になりますが、メスではほとんどが七〇kg以下です。メスは、成獣でも二五kg以下の個体があります。二五kgに満たない個体でもしっかりと仔グマを育てています。

年齢

三才以上の成獣個体について、オス一四頭、メス七頭の平均年齢は、オス七、九才、メス八、五才でした(図二)。年齢は、犬歯の後ろにある第一小白歯を抜歯し、切片を顕微鏡で見、年輪を確認して確定します。第一小白歯は退化している小さな歯で、クマの生活に支障をきたさないと考えられています。メスの最年長は一八才、オスの最年長は一五才以上でした。以上とは、それ以上の年輪が確認できなかったということ、一五才以上生きていることは明かです。一五歳以上の個体は、二〇〇〇年にも生存を確認していて、すでに二〇才を越えています。黒い体毛を持つツキノワグマも、二〇才を越えるとしららがが増えて、頭が栗色に見えてきます。また、木彫りのヒグマのおでこが出っ張ってきます。この個体は、一九九五年に上高地の徳沢で捕まえたので、徳沢太郎と名付けました。私は、徳沢の主人と名付けたのです。

行動圏面積

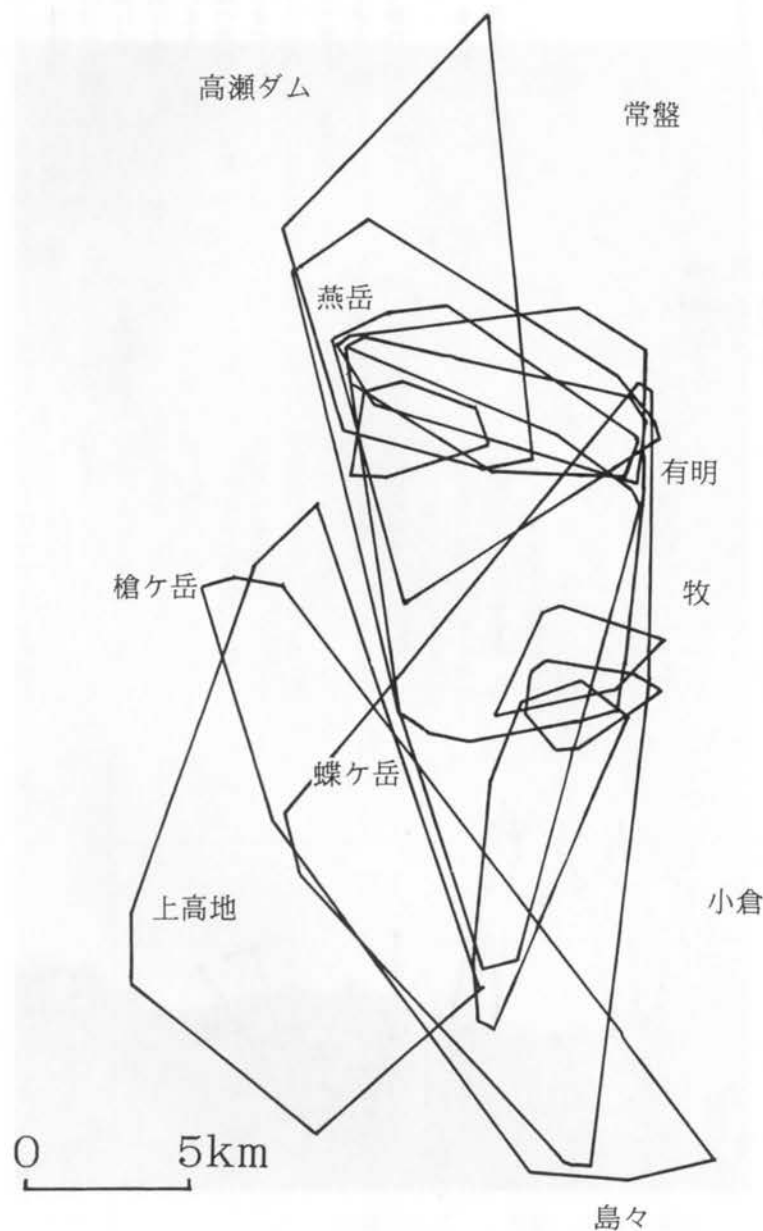
三才以上の成獣個体で一年以上行動追跡ができた、オス六頭、メス五頭の行動圏面積の平均は、オス四二・〇⁺km²、メス二七・一⁺km²でした。行動圏の最も広がった個体ではオスでは二二二・六⁺km²、メスでは八一・七

⁺km²でした。各個体の行動圏を図三に示しました。クマたちは、アルプスの懐の奥深くから平との境界までを縦横に動き回っていることがわかります。また、各個体の行動圏は重なり合っています。他の個体の侵入に対して攻撃を行う、いわゆるなわばりは、ツキノワグマにはないと考えられます。このため、食物が豊富にある場所には、複数の個体が集まることができます。その場所で、強い個体と弱い個体との関係ができることとなります。残飯を捨てていた時代、一頭ものクマがやってき

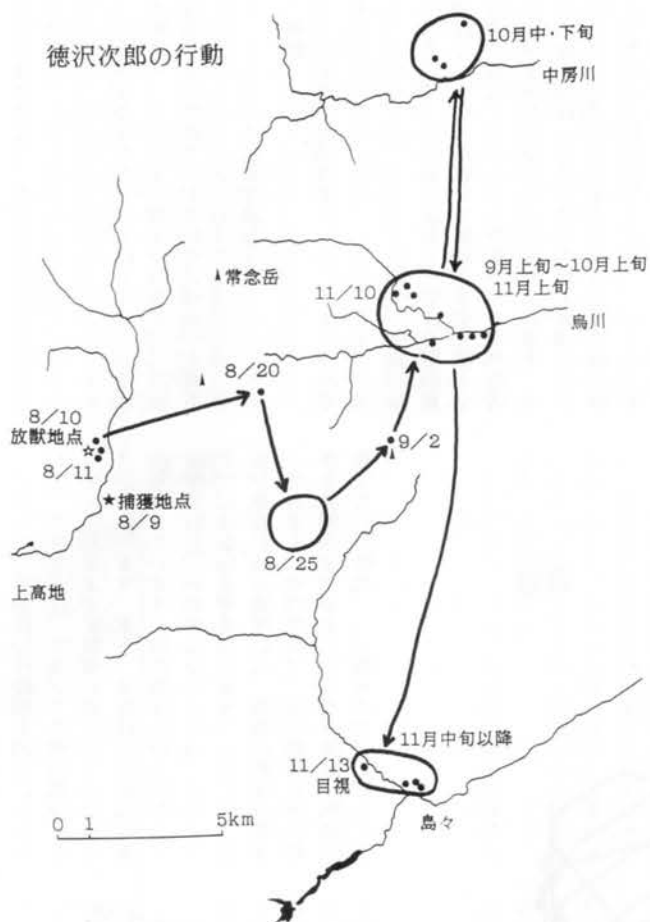
ていた山小屋がありました。弱いクマは、強いクマが満腹するまで残飯にありつくことはできません。クマにも順番待ちがあります。

行動パターン
図四には、一九九五年に上高地で捕獲した若いオス、次郎の行動追跡の結果を示しました。次郎は放獣して数日後に、上高地側から電波が受信できなくなりました。そして、八月二〇日に蝶ヶ岳を越えて鳥川側にいることを確認しました。九月上旬から一ヶ月ほどは

鳥川に留まりましたが、一〇月には中房川まで行き、十一月に入ると再び鳥川に戻りました。クマの行動には、定着→移動→定着という行動パターンが良く見られます。次郎は、十一月一〇日に鳥川から去った後、三日後に直線で約一八km離れた鳥川で発見しました。クマが直線的に動くことはありませんので、次郎は二〇km以上の距離を三日で移動したことは間違いありません。私は、クマの移動能力に驚かされました。



図三



図四

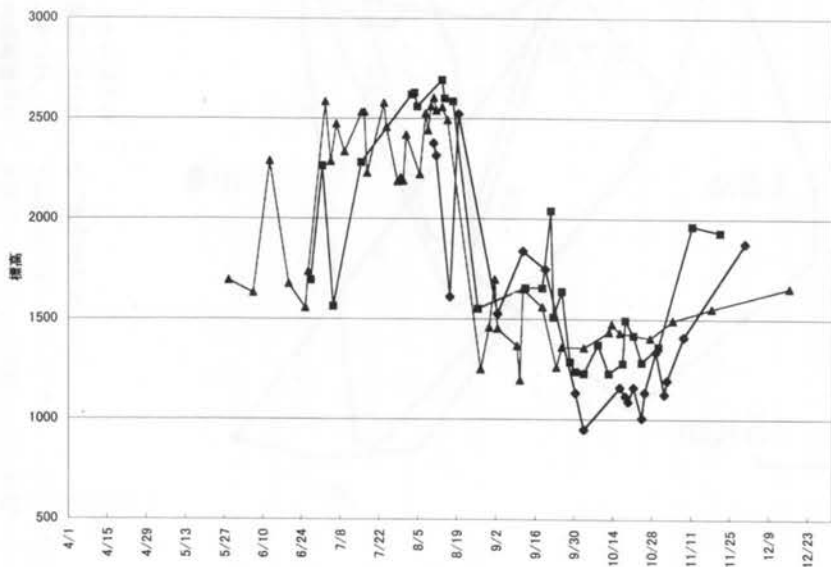
クマたちは、北アルプスの厳しい自然にすっかり根ざした生活をしていることがわかります。また、一方で人為的影響も深く受けていることがわかります。

(野生動物保護管理事務所)

季節移動と環境選択
 図五には、一九九六年にアルプスの稜線で捕獲した、ささというメス成獣の確認標高を示しました。標高二〇〇m以上の確認は、六〜八月であることがわかります。九月以降は、標高二〇〇m以上の確認はほとんどなくなり、高山帯や亜高山帯上部に出現するクマたちの主食は、お花畑のシシウドやアザミなどです。しかし、ミズナラのドングリが主食となる九月以降は、標高一六〇〇m以下の落葉広葉樹林で確認されました。これまで、高山帯や亜高山帯上部で捕獲したクマたちは、すべての個体が季節移動を行っていました。毎年、槍ヶ岳から山麓の鳥々までの二〇kmの道のりを、三年間にわたって往復す

ることを確認したメス個体もいます。高山帯や亜高山帯上部の利用は、アルプスなどの高山でなければ見られない行動様式です。毎年夏には、山麓でトウモロコシなどの農作物被害により、多数のクマたちが有害駆除されています。山麓のクマたちにとっては、夏は試練の季節です。夏は芽生えがなくなり、稔りもまだないという端境期にあたります。アルプスの稜線では、雪渓の周囲では夏の終わりまで芽吹きがあります。端境期のない高山帯や亜高山帯上部のお花畑は、クマたちにとって優れた採食場所です。

おわりに
 落葉広葉樹林でしっかりとドングリを食い溜めしたクマたちは、移動を行い再び標高を上げて冬眠をします。冬眠穴は、シナノキなどの落葉広葉樹の樹洞や岩穴を確認しています。しかしほとんどの個体が、人が近づくとすくすくできない、厳しい地形の場所で冬眠しています。狩猟獣であるため、こんな個体しか生き残れなかったのかも知れません。一月一五日の狩猟解禁日を、まるでクマたちは知っているかのようです。また、鳥川は、食い溜めの場所になっていますが、冬眠をする個体はほとんどいません。鳥川にはクマたちが冬眠することができるような大きな木がありません。造林が進んだ鳥川の谷では、クマたちの生活は完結しないようです。このように、人為的な影響がクマたちの生活に深く関わっていると考えられます。



山と博物館第45巻第10号
 発行 一九九九年十月二十五日発行
 〒長野県大町市大字大町八〇五六一
 市立大町山岳博物館
 TEL 〇二六 一一二二 〇二二
 FAX 〇二六 一一二二 〇二二
 印刷 大糸タイムス印刷部
 定価 年額 一、五〇〇円(送料共) 切手不可
 郵便振替口座番号 〇〇五四 〇七 一三三九三